

## 近世西川地方における山方荷主町田家の江戸進出

—町田屋栄助店・藤田屋喜助店—

丸 山 美 季

### はじめに

本稿では、西川地方（埼玉県の入間川・高麗川・越辺川上流域に成立した杉・檜の育成林業地帯）の代表的な山方荷主町田家<sup>①</sup>の江戸への進出過程および最初に出店した材木問屋の店について検討する。江戸進出の背景を、町田家とそれを取りまく上名栗村の経済状況と共に、江戸材木市場の動向とも関わらせながら分析し、同家の経営において江戸店が果たした役割について考察するものである。さらには、山方荷主が江戸に出した店が、西川材の流通発展にどのような影響を与えたのかを明らかにすることを目的とする。

町田家は、武蔵国秩父郡上名栗村（現埼玉県飯能市大字上名栗）の名主を代々勤め、炭・材木・穀物・日用品商売などを営む山村豪農として知られている。同家は、材木生産・伐出・流送に関わるだけでなく、寛政期（一八世紀後半）にはじめて江戸に材木問屋の店を出し、直接取引をはじめていく。筆者は、前稿で、文政期（一九世紀前半）に

深川に出した町田家の三軒目の江戸材木問屋の出店について検討し、深川に店を出すことができたのも、それ以前に浅草今戸町の店が出店されていたことが、大きく関係していたことを明らかにした。<sup>(2)</sup>

以下では、町田家の江戸における最初の店である町田屋栄助店、藤田屋喜助店について見ていくことにする。

## 一、江戸進出以前の町田家の動向

町田家の江戸進出については、既に山中清孝氏によって明らかにされている部分も多い。<sup>(3)</sup> 山中氏は、町田家の江戸進出は、「生産力の発展の『原因』というよりはむしろ『結果』というべきで、江戸に進出するほどの財力を蓄積したのは宝暦〜天明期（一七五一〜一七八八）であろう<sup>(4)</sup>」と述べている。史料制約から、江戸進出の直接的契機や前提となる具体的な経営状況など詳細は明らかにできないという限界がある中、寛政期前後の上名栗村の経済構造を生産・商品流通の面などから分析し、町田家の江戸進出をその中に位置つけた発言である。

以下、一では主にこの研究に依拠しながらも、江戸進出以前の町田家を取りまく上名栗村の宝暦〜天明期の状況について、別の観点から改めてとらえなおし、町田家の江戸進出を考えてみたい。加藤衛弘氏によれば、その時期に上名栗村の基幹産業である林業において炭・薪生産から材木生産への傾斜が見られていくことが指摘されている。<sup>(5)</sup> そのような動きと町田家がどう関わるのかという視点から考察していくことにする。

その前に、この時期の町田家の経営全体の動向を確認しておこう。土地所持の面から見ると、町田家の石高は、享保八年（一七二三）の段階では、五石二斗一升余りで、村内二位であった。しかし、石高ではとらえきれない広大な

表1 上名栗村階層構成と町田家所持高変遷表

年号	明和1	安永3	天明4	寛政6	文化1	文化3
20石以上	0	0	0	0	0	1
10~20	1	1	1	1	2	1
5~10	1	2	2	2	6	6
1~5	136	133	115	132	97	94
0.5石未満	61	60	53	58	59	57
合計	199	196	171	193	164	159
町田家石高	5.852	6.301	6.831	7.7633	19.2	24.552

注) ①山中清孝『近世武州名栗村の構造』所載

第45表(1)正徳4~寛政6年(10年毎)階層構成表(170頁) }より作成。  
第51表階層構成表(178~179頁)

②文化元年(1804)以降の石高には、享保期に芦ヶ久保村に開発した新田高  
分が含まれている。

山を所持していたことが、貞享三年(一六八六)時の家督相続史料などによりわかっている。<sup>(6)</sup>表1によると、寛政期ごろまでは石高の面では急激な増加は見られない。また、同家が、寛政期前後すなわち、江戸進出前後に材木商売以外には、どのような商売を営んでいたかという、様々な商売・酒造、<sup>(7)</sup>煮売渡世、髪結、質屋など、様々な業種の店が人を雇って出されていた。<sup>(8)</sup>なお、元禄期には金を貸し付けて、返済できない場合に質地を取得するという土地集積も開始されている。<sup>(9)</sup>

次に、上名栗村の経済状況を見ておこう。上名栗村には、田はなく、畑といっても実質的には「切替畑+附属林(かぶり山)」である下々畑・切畑が大半で、そのほかの大部分も幕府の御林や入会地が占めるなど、広大な山林・林野が広がっていた。このように農業生産力の低い土地で、年貢を納め、夫食を買い入れ、村の再生産構造を維持するために行われた経済活動が、林業生産であった。加藤氏によれば、寛文検地以前の明暦~万治期(一六五五~一六六〇)には既に私的な山林が存在し、近世初頭の早い時期から林業生産がなされ、初期には薪炭生産が中心に行われ、それによってたらされた剰余によって人工造林化が進められたことが明らかにされている。<sup>(10)</sup>すなわち、商品になるまで時間はかかるが、商業利潤のより上がる江戸市場を対象とした

材木生産に力が注がれていったものと推測されるのである。またこのような変化を窺わせるものとして、「村明細帳」の中の記事の変化は象徴的である。<sup>(1)</sup>享保期には農間稼ぎとしては「炭焼」が第一にあげられていたが、宝暦三年（一七五三）の「村明細帳」から、はじめて筏流しのことが出てきて、以後はそれが村の生業の中心に据えられていくのである。

このように、上名栗村においては、最初に木炭生産、しだいに材木生産のほうへ比重が移っていくという動きが見られるのである。それを端的に示すのは、人工造林の入会地への侵食であり、すなわち入会争論の頻発である。

では、その内の一事例として、宝暦十二年（一七六二）の入会争論をとりあげ、それを通じて町田家の動向を見てみよう。「差上申済口証文之事」という史料<sup>(12)</sup>によって経過を追ってみる。

上名栗村の炭焼の者が、炭谷入と人見入の入会地の利用をめぐる、古組名主銀右衛門らを相手取り出訴した。発端は、宝暦一二年閏四月、古組名主銀右衛門・組頭重右衛門・八助・太七・嘉免八・新組名主半兵衛の六人が頭取となつて、医王寺に惣百姓を集め、「両谷之儀（炭谷入・人見入―筆者注）ハ百姓入会ニ付拾四、五年も山稼相止候へは、立山ニ相成、大勢為ニ成候間」として、連判するように申し聞かせたことにはじまる。つまり、入会地での山稼ぎを一四、五年しないでおけば成木になり、それを売った方が大勢の利得になるので賛成するようというのである。注目される点は、この時期既に炭に焼いてしまうよりも、立木にしておいた方が利益になるという意識を持っているところで、その推進者の一人に古組名主銀右衛門―町田家がいたのである。

その提案に賛成したのは、百姓三四〇〜五〇人の内、炭焼き稼ぎをしない者と入会に遠いところに住んでいる者の七〇人であった。それに対して、炭焼きの者は、畑が不足がちな村なのに山稼ぎもできなくなったら難儀すると反対した。そのため、計画に賛同し連判しなかったことを遺恨に思った相手側から、炭焼きを差し止め、無理にするなら

ば炭釜を壊すと脅されて、炭焼の者は出訴したとなっている。炭焼人の主張をまとめると、前々から入会地で炭焼きの仕事をしていること、炭焼きができないとしたら炭焼人以外にも駄賃稼ぎの者などまでが難儀し、村の大勢の困窮の元であるとしている。

次に訴えられた相手側の主張を見てみると、全面的に反論している。炭釜を壊すなどとは言っていないことや入会地の利用法についても前にも出入に及び裁許を受けており、秣場と畝歩持百姓の入会地を明確に分けたので、そこで炭焼きを前々からしていたというのは根拠がないことを申し出ている。炭焼人は入会地の近くに住み、近年勝手に炭釜を作って生産を行い、入会百姓の中に不公平さが増していたため、全員に利益が配分されるように考えたのが前にあげた提案だというのである。

結局、この争論の結末は、内済で決着している。これによって、出訴方の炭焼人は、炭焼差し止めを命じられている。相手方については、秣場の一部を「立山」にする計画もまずは取りやめて、良く話し合って決めるようになつたのである。

以上が経過であるが、争点をまとめてみたい。一見すると、この争論は、製炭原本を確保しようとする者たちと人工造林を推進していこうとする者たちとの対立であるかのようである。しかし、実際のところどうだったのか。ここで、人工造林推進派の主張の中の一節を引用する。

炭焼之儀ヲ古例之様ニ申立候ハ相違偽ニ御座候、殊ニ炭焼惣代之者義ハ畝歩持百姓ニ而炭焼候者ニ而ハ無之候所、炭焼共ハ此度荷担仕候ハ右之者共秣場へ立出し仕置候故、右出立之義可申掠巧ニ相察候間（以下略）<sup>(13)</sup>

これによれば、炭焼惣代の実体は、「畝歩持百姓」だというのである。また、今回、反対するのは、自分が入会地の中に立出を行い、私的な林地を増やしていることを隠すためだとしている点が注目される。炭焼人の反対の背景に

は、一旦、そうして拡大した林が成林してしまえば自分のものと認められるという慣行をうまく生かそうとしていたことが窺える。つまり、争論で対立している両者は、実はどちらも炭商人・材木商であり、実際に炭焼を行う者ではなかったことが読みとれるのである。要するに、末端の炭焼人の意見を代弁しているようで、実は違ふと考えられる。この事例によっても、具体的にこの頃には木炭生産から材木生産へと重点が移っていた様子が明らかとなった。そのような動向に、いち早く積極的に取り組んでいったのが町田家だったのではないだろうか。町田家は、村内でも石高・地位共に高い位置を占め、炭・材木商としても活躍をはじめていたが、一方では、町田家よりも早く村に入村したとされる檀沢の浅見家などという有力者も存在していた。そのような中で有利な立場に立つために、江戸に店を持ったのではないだろうか。このように想定していく上で、注目されるのが、町田家の江戸進出以前に江戸の材木問屋との取引を示す史料というのが、ほとんど残っていないということである。もちろん、江戸と取引が行われていたことは間違いないので、まだこの時には定まった取引先がなかったことを意味するのかもしれない。取引先の安定のためなどにも、販売先である江戸に拠点を持つことは、重要な意味を持ったことといえるだろう。

以上、見てきたように、町田家が江戸に進出した寛政期前後には、材木商売によって上名栗村全体が活気づいていたことは明らかである。木炭生産から材木生産への転換が行われた時期に当たり、町田家はその動きに敏感に対応したと推察できる。そして、さらに江戸に拠点を築くことで、この後に有利な基盤を作ったのではないだろうか。この意味では町田家の江戸進出は、発展の原因でもあり、結果でもあると位置づけられるが、以後の江戸での材木問屋経営の拡大を想起すると、後の発展の基盤になった面が強いように思われる。

## 二、江戸材木市場の様相

一で見たように、町田家の江戸進出の前提には、以下の諸条件が揃っていたことが指摘できる。まず、江戸市場向けの材木生産、筏流しが盛んになりはじめた西川地方の一般的状況があった。また、この時期の町田家は、炭・材木商売を基盤にして、その経営の拡大を図っており、江戸に店を開けるほどの資力は備えていたことが窺えた。

しかし、そのような側面からだけでは、西川地方の一山方荷主である町田家が江戸に材木問屋を持つに至った動機が説明しきれないと思う。当時の一般的な江戸材木問屋経営の状況について触れておくならば、材木流通は活発化している反面、既存の流通ルートを通さない取引の横行により、問屋の衰微が目立ってきた時期といえる。言い換えれば、問屋による集荷独占力の低下が見られたのである。そのような状況の中で、この時期に町田家が江戸に問屋を開設したことは、注目されるところである。江戸進出の背景をそのような客観的条件と、併せて考察することは必要であろう。そこで、ここでは、寛政期ごろの問屋の動向を検討した上で、町田家の江戸進出の理由を考えてみたい。

江戸市場における材木の流通経路は、山方荷主―材木問屋―仲買―消費者という流れになっていた。<sup>14</sup>享保期に問屋・仲買を機軸とした正規の材木の流通構造が確定され、従前通り江戸地廻りの林業地帯からの材木・薪炭は一手に川辺問屋が引き受けることになっていた。しかし、彼らに実質的な流通特権が認められるのは、延享元年（一七四四）の町触を待たなければならぬ。これは、川辺一番組古問屋がこれ以上新しい問屋ができるのを制限してもらうために鯨船廻り御用を冥加として請け負うことを願い出て、引き換えに出されたものである。次にその触れをあげておこう。

竹木炭薪問屋人数相極候町触<sup>(15)</sup>

壹番組竹木炭薪問屋共之内兩國水防之鯨船之儀御用相勤候、依之右之問屋有来五百廿四人之外者自今問屋出来不致候筈ニ候間、右之通可相心得候

一、右問屋共方江来候商売物川口江出候而直買致候者仲買などの内ニも有之由出買出売者前々々停止之事ニ候処不届ニ候、向後右之儀於有之者吟味之上急度可申付候間、此旨町中不残触知者也

すなわち、川辺問屋の株を五二四人で締株にすることが命じられたのである。また、注目すべき点は、仲買などの内にも川辺問屋送りのはずの材木荷物を川口まで出て行って直接買う者がいるという例をあげた上、出買・出売のような取引を禁止しているところである。この時には、すでに既存の流通機構を乱す取引が横行していたことが窺われる。そのような取引は「前々々停止」とあるように仲間内では取り決められていたが、ここに至って幕府によって明確に定められたのである。要するに、幕府は川辺問屋の自発的な動きを利用して、材木の流通統制の一端をその組織を通じて行おうとしていたといえよう。

また、この頃に、「角木出入」という木場材木問屋と川辺古問屋七人<sup>(16)</sup>で、木場材木問屋の株を一つ持ち、木場町に売り場を作り、そこで売買することを決着した一件があった。これによって、取引場所が決められたとしても、木場材木問屋の特権的取扱品とされていた「材木榑木之類」が合法的に扱えるようになったのである。他にも、横川の川浚を願い出るなどといった例<sup>(17)</sup>からもわかるように、冥加を出してでも川辺問屋が公的特権を得ようとする積極的姿勢が窺われる。つまり、延享期（一七世紀前半）は、川辺問屋にとって、勢力伸長の一つの画期となったといえることができる。その反面、すぐに出買・出売を禁止する再触が願われていることから類推できるように、正規の流通ルート<sup>(18)</sup>を乱す取引があつたとせず、安定的な状態を保つことはできなかった。それに対して、川辺問屋は、問屋を通さ



ない売買の摘発を行っている。

まずその一例として、寛政四年（一七九二）に起きた西川地方の山方荷主と千住の筏宿との取引をめぐる一件をとりあげておこう。<sup>(18)</sup>この事件の概要は、千住の筏宿と上名栗村要右衛門が直接取引したことを問題とし、川辺問屋がそれを町奉行に訴え、その結果として山方・筏宿双方が罰せられたというものである。千住の筏宿とは、千住川口に住む農民が余業としていた小商いから始まったといわれる。<sup>(19)</sup>明和期（一七六四）には、薪炭を扱う店が多数成立し、寛政期（一七九八）になると、千住は、西川材だけでなく江戸地廻りの筏が相当数集まるような江戸近郊の材木の一大取引市場の様相を呈していた。もともと、筏宿の役割は、山方からの荷物の取次ぎをし、江戸の材木問屋に転送することであった。しかし、半ば公然と売買が行われていたのであるが、この時に川辺問屋による取締りの手が入ったのである。その後、町奉行所は、千住の筏宿八人を「千住仲買」として認知し、川辺問屋もそれに従った。しかし、今度はおさまらないのが江戸の材木仲買で、川辺問屋との間で争われたのが「千住八人者事件」という一件である。<sup>(20)</sup>この千住の筏宿との問題は、決着はなかなかついていない。<sup>(21)</sup>なお、この時期に、千住だけでなく青梅からの筏を受ける多摩川の川口にある六郷などの筏宿でも同じような事態が起こっていたことが指摘できる。

次に、ほぼ同時期に川辺問屋と山方荷主が、材木の他に炭・薪についての取扱いをめぐる争っていた事例を紹介しよう。

寛政十一年（一七九八）、九月、「川辺問屋炭薪問屋行事」を含む三三名が、入間郡林村勘左衛門を相手取り、訴訟を起こした。<sup>(22)</sup>延享元年の町触以来、この時期にまた山方荷主の中に禁止されているはずの直売を行う者が多く見られ、取締りに乗り出したのが発端である。

まず、川辺問屋の主張をまとめてみよう。川辺問屋側が、荷主達に以後は直売せずに問屋へ荷物を送るようにと掛

け合ったところ、ほとんどの者が承知してくれた。しかし、その中で、山方荷主勘左衛門という者は、「当屋敷様江荷物前々方相納候由直買類相止段」という行動をとったのである。つまり、「当 御屋敷様」へは前々から荷物を納めてきたが、それが直買にあたるというなら止めると言ったのであろう。それに対し、川辺問屋は、「御屋敷様」への納入は取締りの対象としていないので、これまで通り差し支えないようにしてほしいと掛け合ったが、勘左衛門は承知しなかった。そこで、「御屋敷様」や同意してくれた荷主の迷惑になるので出訴したというのである。ここで、川辺問屋が、根拠としているのは、前述した寛保三年の鯨船御用の冥加に対して人数制限が行われたことや延享元年の町触であった。

これに対し、一〇月には、勘左衛門一人にとどまらず多摩郡・入間郡・新座郡炭薪渡世人三五か村の者たちから、反対に奉行所に訴えが出されている。さらに、それに加えて、炭・薪を引き受け運ぶ五河岸（寺尾・古市場・水子・鶴間・引又）の河岸船積問屋をも巻き込んだ大規模な争論となった。その時の訴状によって、今度は荷主側の言い分を見ておく。

多摩郡・入間郡・新座郡の村々は、畑勝ちの村で、農間稼ぎで炭・薪を江戸へ出して生活を成り立たせている場所である。その炭・薪の調達から江戸までの輸送方法について述べてある部分をまとめれば、次のようである。炭は、武州多摩郡八王子村、五日市村、青梅村、高麗郡飯能村の山方から買い受けたり、村内の地味の悪い場所で生産したものを出荷する。薪は、村内から伐り出したものであった。つぎに、江戸へ送られる炭・薪は、方面によって運搬方法が違っていたようである。一つは陸附けし、川下げて江戸に至るというルートである。すなわち、四谷・青山・番町・小石川方面へは「直附込」にし、本所・深川・築地・芝口・桜田・小川町・下谷・浅草辺へは陸出し、川下げてであった。そして、五か所の河岸まで陸出しする仕事も数年来近在の百姓のかかせない稼ぎになっていることを強調

している。このように武家屋敷への炭薪の納入は、炭薪渡世人だけでなく近隣百姓全員の命綱であるから、今まで通り直接取引きできるようにしておいてもらいたいと主張している。

これに対し、相手側（炭薪問屋）は、五カ所船積問屋を回り、荷物の積み出しを差し止めたり、直売は禁止されているのでそれを守るようにとの一札を出させるなど、取引の干渉にまで及んだのである。

山方荷主は、武家屋敷への「直入」が認められているのは前々からのことであり、家来同様の身分故安く炭・薪を提供していることをアピールして、事を有利に運ぼうとした。また、問屋の意図するところは「下直ニメ買致シ高直ニ売捌存念」にあるとし、いかに問屋側が理不尽であるかを主張し、もし「御入口荷物新規ニ江戸問屋仲買共差配を請候而ハ近在々之者共可行立様無御座」と訴えているのである。

裁許が下ったのが、翌年の九月であり、内容は次のようである。訴訟人の主張するところである、江戸表へ送る炭薪の儀は、以前から武家方へ直売してきたのであって、町方へ問屋を通さずに直売したわけではないということは認められた。しかし、一方の相手側の武家方へ直売の分も他と同じように引き受けないという願いは認められなかった。武家方との関係を強調した炭薪渡世人の勝訴に終わったのである。この争論からは、この時期には武家方に納入すると見せて、それにかこつけて炭薪を直売する状態が横行していたことが窺える。川辺問屋としては、そのような事態に手を焼いており、どうにかして打開しようとしていたのではないだろうか。それが、反対に訴えられ、問屋の主張は認められなかったのである。

以上のような事例から窺えるように、近世後期になるにつれ、山方荷主・筏宿などの在方商人などの成長により、旧来の流通機構と対立する動きが見られた。そして、問屋は、それが衰微を招く原因だとして、幕府の権威をかりて取り締まろうとしていくのである。

いわば、このような状況のなか、町田家は、川辺一番組古問屋の株を取得して、店を開いたのである。出買・出売のような流通ルートを通さない取引が横行する背景には、問屋に委託しておくだけでは多くの利潤を得ることが困難になっていたことを示していよう。しかし、幕府が問屋を通じて材木流通を掌握しようとする政策をとる限りは、不正の取引は不安定さがつきまといつただろう。もし、前述したように、摘発された場合には今後の取引の差し支えにもなるし、大量の荷物を送るにはそのような取引仕法を取るのには危険であることが指摘できる。

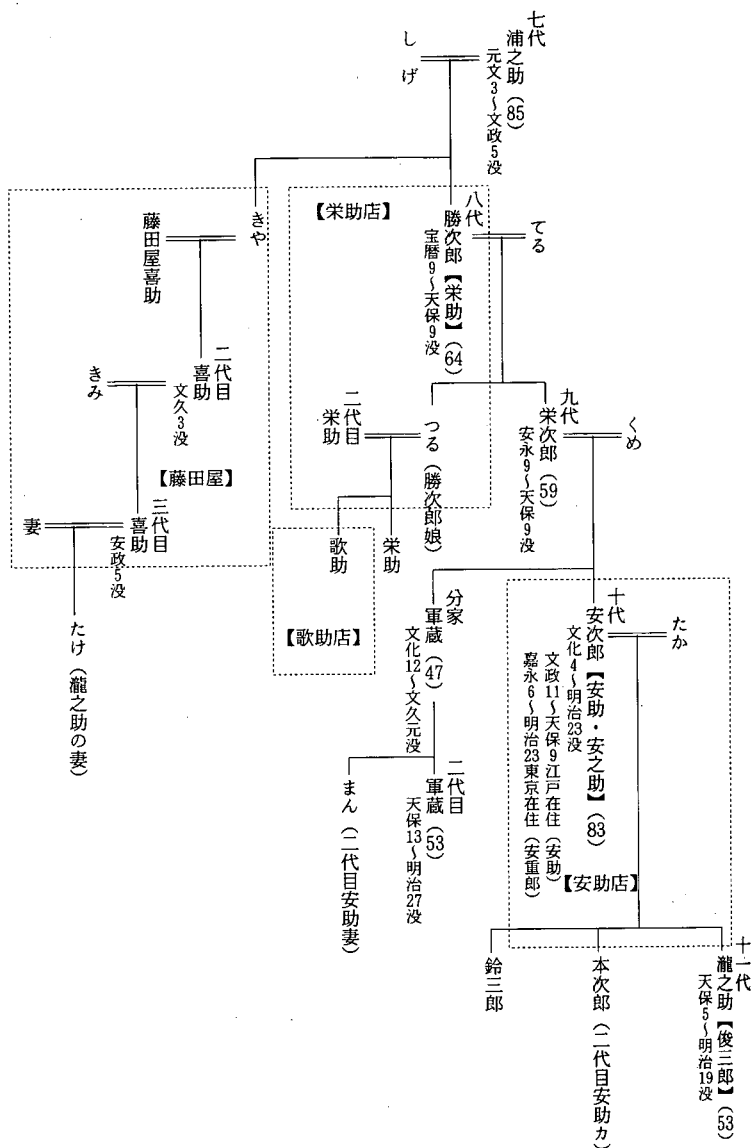
町田家は、近世中期以降、材木生産を増大させ、大量の材木を江戸に送りこむようになっていた。自家で生産・搬出した大量の材木を有利な条件で引き受けてくれる問屋が必要とされたのではないだろうか。それならば、自分で店を出してしまつて、そこを中心に取引した方が都合が良いと判断したと考えることは可能であろう。また、安定した取引先の確保を目指したともいえると思われる。

### 三、町田家による江戸材木問屋店の開業

#### (一) 町田屋栄助店

江戸浅草今戸町に出された町田屋栄助店について見ていく。この栄助は、町田本家の七代目勝治郎であり、江戸に出る際に名前をそのように改めたといふ<sup>(23)</sup>（町田家略系図参照）。「宗門人別帳」によれば、江戸に栄助が住むようになったのは、寛政一〇（一七九八）年以降である。その転出は、天明五（一七八五）年から父浦之助の跡を継いで勤め

近世西川地方における山方荷主町田家の江戸進出



町田家略系図

出典) 丸山美季「商取引文書から見た山方荷主町田家の西川材取引 - 町田屋歌助店との取引を中心として」(『学習院大学史料館紀要』第12号、2003年) 337頁より転載。

注) ( ) 内は死亡時の年齢。

ていた名主役を息子の栄次郎に譲った上のことであった。

一方、この店の開設は、少なくとも寛政五年（一七九三）にさかのぼれることが次の史料からわかる。

#### 問屋株譲渡証文之事<sup>(25)</sup>

一、拙者所持致川辺壱番組古問屋株勝手ニ付、此度貴殿江譲渡申処実正ニ御座候、已来右古問屋株之義ニ付少も差障一切無御座候、為後日問屋株譲渡仍如件

寛政五丑年十月

浅草花川戸町家持

譲人 伊勢屋市郎兵衛<sup>㊦</sup>

本八丁堀四丁目

組合行事 豊田屋三郎左衛門<sup>㊦</sup>

船松町式丁目

同 紀伊国屋伊兵衛<sup>㊦</sup>

#### 町田屋栄次郎殿

すなわち、川辺一番組古問屋の浅草花川戸伊勢屋市郎兵衛<sup>(26)</sup>が今戸町佐兵衛店町田屋栄次郎に問屋株を譲り渡したことを奈良屋役所に届け出たという内容である。これによって、この時点で町田屋は川辺一番組古問屋の株を取得し、仲間の一員になったことがわかる。なお、この他の問屋株譲渡の際に取り交わされた一連の証文によると、組合に入る際にかかった費用は、株譲渡金が一両、仲間披露金が四両二分二朱であった。<sup>(27)</sup>

ところで、ここで着目しておきたいのは、「町田屋栄次郎」という名義で店を持っている点である。また、川辺一番組古問屋組合史料の中にも、寛政十一年（一七九九）までは、その名前で出てくることが確認されることがから、<sup>(28)</sup>当

表2 町田屋栄助店へ送られた筏数

年次		筏数	売上代金				仕切代金				諸掛売手（口銭）			
		艘 振 枚	両 分 匁 分 厘	両 分 匁 分 厘	両 分 匁 分 厘	両 分 匁 分 厘	両 分 匁 分 厘							
文化	5(文化4年4/6~10/4)	3 13	101 2 7 1 6	4 1 2	71 3 5									
〃	8(文化6年1/29~7年11/2)	18.5 48 34	719 1 9 1 4	7 2 1 4 2										
〃	9(文化8年2/16~9/14)	17 27 41	518 1 13 2											
〃	10(文化9年2/18~10/14)		490 3 10 9 8											
〃	13(文化11年2/16~10/9)		314 1 9 4 1	6 3 1 4 1										
〃	14(文化13年3/8~10/15)	8 42 22	363 2 12 4 1	7 3 9 5	36 1 6 8 4									
文政	7(文政7年2/4~9/19)	12.5 49 46	516 2 14 2 1	10 2 11 2 9	51 2 9 8 2									
〃	10(文政9年3/14~11/16)	20.5 27 23	759 1 5 6	15 1 4 1 6	75 3 8 5 5									
〃	11(文政11年1/4~11/1)	16 84 66	1008 8 3 9	78 17 1 4	100 3 3 6 3									
〃	12(文政12年2/27~9/26)	26 42 59	965 2 2 2	23 2 2 4	96 2 2 3									

注) 町田屋栄助差出各年「仕切帳」(町田 4125・4127・4128・4130・4132・4133・4142・4152・4155・4161より作成)

\*年次の( )内は入荷期間

筏数に上荷は含めていない。なお、筏の単位は、艘>振>枚(筏1艘=24枚)

初は町田屋栄次郎店と称していたことが窺えるのである。それではなぜ息子栄次郎の名前を使い、当初から勝次郎店もしくは栄助店としなかったのは疑問が残るところである。<sup>(29)</sup>ちなみに、この時は栄次郎は一四才で、上名栗村にいた。その理由を明らかにしうる史料はないが、寛政五年段階にはまだ勝次郎の名で名主をしていたことを想起すると説明がつくように思われる。やはり、名主をしている間は、同じ名前でも江戸で店を持つということについては憚りがあったのではないだろうか。寛政一〇年に名主の後役をめぐってもめごとが起きており、それ以前に勝次郎(栄助)は江戸にいたことが、栄次郎の日記からもわかっている。<sup>(30)</sup>このことなどから、勝次郎は名主を譲った上で、名前も改めた上で、江戸店の経営に本格的に専念するようになったのではないかと推測される。

以下、店の経営についてみていく。

さて、表2は、栄助店から上名栗村の栄次郎に提出された文化五年(一八〇八)から文政二年(一八二九)までの「仕切帳」から作ったものである。「仕切帳」という史料は、材木問屋が山方荷主への筏荷持の仕切金を支払うためにつけた帳簿である。それによると隔年ではあるが、名栗村の町田家からの筏流送量、売上金、仕切金の額を追

うことができる。これを見ると、順調に取引量を増やし、特に文政期にはいって伸びが大きいことがわかる。つまり、経営拡大の傾向にあったことが推察されるのである。

つぎに、文化期（一八〇四）の栄助店の活動状況が窺える事例をとりあげておく。

栄助店は、文化九年（一八一二）の「浅草御蔵根太木上納一件」<sup>(31)</sup>と呼ばれる筏川下げの安全確保を目指す飯能川上村々の筏商売人たちの運動で重要な役割を果たしている。この一件は、浅草御蔵に近い栄助店の存在を前提にして行われたものである。これまで浅草御蔵で買い上げてもらってきた分の一〇か年の値段を平均して、その五割引で、五年の年季の間値段を固定して、根太木を納めさせてほしいというのがこの請願の趣旨で、本家の町田栄次郎主導のもとに幕府に願い出されたのである。審議途中、勘定奉行から御蔵奉行の掛にまわされるなど紆余曲折はあったが、最終的には許可された。そして、安値で浅草御蔵に納める根太木は、筏仲間内の取り決めで、普段から筏一艘につき杉・丸太（長さ二間・末口四寸）を二本ずつ、または木代金では金二朱ずつを栄助店に差出せておき、そこから供出することとなった。その結果として、少なくともその取り決めの履行のためだけにでも、西川地方の有力な材木商人の筏が栄助店に集まってくるという構造が作られたのである。つまり、この一件は、栄助店の江戸での西川材の流通拠点としての地位を高めることにつながったと思われる。また、本家にとっては、西川地方の他の材木商人の中でリーダーシップを発揮する好機であったともいえるだろう。

一方で、江戸材木問屋の側では、ほぼ同時期の文化一〇年（一八一三）に、川辺一番組古問屋の小山喜左衛門を中心とした一部の材木問屋の者が千住などの川口に筏改所を新規に願い出るといった一件が起こっている。<sup>(32)</sup>町田家文書の中に、その時の願書の下書が残っているもので、それによって経過を追うと共に、その頃の問屋の状況を見ておきたい。「下書」の中で、この請願をするに至った経過を次のように述べている。



諸国の荷主から御府内の材木問屋へ送る材木には送り状がつけられており、その名宛の問屋に送るきまりであった。しかし、関東の内の多摩川・荒川・利根川・鬼怒川・思川筋から来る筏には送り状がないものが多く、また荷主や筏乗手の勝手な取り計らいで売り捌かれることが良く見られ、品物が入ってこないため問屋が難儀をするといった状態があった。それに対して、問屋は、幕府に冥加を出して触れを出してもらったり、出訴したりして取締りを強化していたが、根本的な解決とはならず、「近來江戸問屋仲買素人ニ不限出買仕候様相成」事態を招いていた。それを取り締まるために、筏材木改め所を建てることを許可してくれるよう願ひ出て、それが認められれば、「両国御橋丸太芥除杭木丸太二式」を冥加として納めるとしている。その費用には、筏改めの際に金を徴収してあてようという計画を立てていた。材木問屋の試算では、三カ年平均にして一年間に筏が一万九〇〇〇本程入津し、それから一枚銀六分宛を取り立て、およそ一九〇両集まることになっていた。また、改め所は、六郷川口（多摩川）・千住川口（荒川）・新川口（新利根川）の三ヶ所に建てることを提案していた。この改め所の設立により、直売・抜荷などの不正な行為もなくなると予想している。しかし、結局のところ、このような荷物改所を設けることは、一部の問屋しか利益を得ることができないからか、三問屋の反対で実現しなかった。<sup>(33)</sup>

この事例からも、前節でも見たように問屋を通さない流通が横行し、品物が思うように集荷できず問屋がますます衰微していく状態にあったことが確認できた。また、その主な原因が、江戸地廻り地域の荷主・筏宿によるものだったのである。しかし、その点、生産地と直結した栄助店にとっては、有利だったのではないだろうか。それは、「浅草御蔵根太木上納一件」の検討によっても、裏付けられるところである。なお、付け加えておくと、このような問屋の動向も、江戸に店を出していたからこそ、知りえた情報であろう。このように情報収集ができることも、町田家が江戸に店を開いた大きなメリットだと思われる。

表3 栄助宛流質地証文一覧

年月	流地持主名前	場所	畑・種別	借用金額
文化 8年 2月	上名栗村要助	字小出の下	切畑 5畝 4歩	19両1分
" 9月	" 七郎兵衛	字たつの沢	切畑 2畝 24歩	21両
" 11月	" 馬之助	字土橋日影	切畑 15歩	12両
" 12月	" 要助	字小出の下	下々畑 3畝	8両3分
文化 12年 10月	" 馬之助	字土橋	下々畑 16歩	16両
" "	" 七郎兵衛	字たつの沢	下々畑・切畑 2畝 5歩	23両
文化 13年 8月	" 巳之松	字田の本	切畑 2畝 20歩	7両
文化 14年 10月	" 亀次郎	字大蔵入	切畑 1畝 2歩	47両
" "	" "	字はぎのや他	切畑 4畝 他	30両
文政元年 9月	" 丑松	字はぎのや入	切畑 1畝 15歩	29両
文政 2年閏4月	" 伊八	字道下上畑	上畑・中 5畝 21歩他	34両

注) 文政5年に町田屋栄助の遺所として相続した質地証文より作成 (町田家文書)

その後、文政五年(一八二二)二月に、栄助が死去し、二代目栄助Ⅱ勝次郎があとを継いでいる。そして、同年三月には、上名栗村の栄次郎は、今戸町の母から栄助の遺産六七五両を相続している<sup>(34)</sup>。この資産は、栄助が江戸店を出してから増やしたものである。なお、一二五両分が、流地証文、年賦証文、売本証文一四通分からなっており、土地で渡されたようである。栄次郎が相続した栄助宛の質地証文から作成したのが、表3である。文化八年(一八一二)から文政二年(一八一九)までの九年间で、二四七両の資金で一二件の土地を取得している。なお、集められたのは、下々畑・切畑がほとんどで、また、それには面積以上の添林がついている場所であることもわかっている<sup>(35)</sup>。このように、江戸店の経営から得た利益によって、山林の集積を行っていたのである。

それから、店の経営者が変わったことによると思われるが、文政五年の決算を示す「勘定取調帳」<sup>(36)</sup>が唯一残っている。藤田屋喜助を立会人として、町田屋栄助から、本家の町田栄次郎に報告されたものである。この勘定帳をまとめた表4によると、この時点での資産としては在庫、掛残り、仕入貸し金などの合計三一九三両三分四朱余があげられている。また、八月に勝次郎は、祖父の浦之助から今戸の町屋敷の相続もしている<sup>(37)</sup>。寛政五年段階では、店借りだったことを思えば、こうした点からも

表 4 文政 5 年町田屋栄助店勘定

費目	金額	
已年残代品物	金 869 両 3 分	銀 6 匁 9 分 5 厘
午年春入内金	623 両 2 分	2 匁 3 分 3 厘
已年掛残り	25 両	9 匁 7 分 6 厘
荷主仕入貸金	688 両	
江戸証文貸金	538 両 1 分	
有金	194 両 2 分 2 朱	
板店与兵衛方へ出金	324 両 2 分	銭 17 貫 783 文
差引	3193 両 3 分 4 朱	4 匁 4 厘、銭 17 貫 783 文

注) 山中清孝『近世武州名栗村の構造』107 頁所載〈第 21 表江戸店勘定目録 (2) 文政 5 年〉を元に町田 5234 より改訂。

店の順調な発展ぶりが窺える。

しかし、これ以後は経営帳簿のような経営状態の推移がわかる史料は残されておらず、具体的な活動については不明である。栄助店は、天保改革後の「諸問屋名前帳」<sup>(38)</sup>に「竹木炭薪問屋、浅草今戸町家持町田屋栄助」と出てくる。しかし、その後万延二年（一八六一〇）に深川東町吉兵衛地借美濃屋善次郎へ株を譲ったことがわかっている。

## （二）藤田屋喜助店

前述した栄助店と時期的にも近く、また同じ今戸町の中に出されたもう一つの店が藤田屋である。六代目浦之助の娘きやに喜助という婿をとってはじめられたという。<sup>(39)</sup>屋号は町田屋ではないが、店の印は十一が使われている。また、喜助がどのような人物で、きやといつ結婚し、開業したかなどの経緯は不明である。

ただし、寛政一二年（一八〇〇）以前には、店があったことが次の史料からわかる。<sup>(40)</sup>

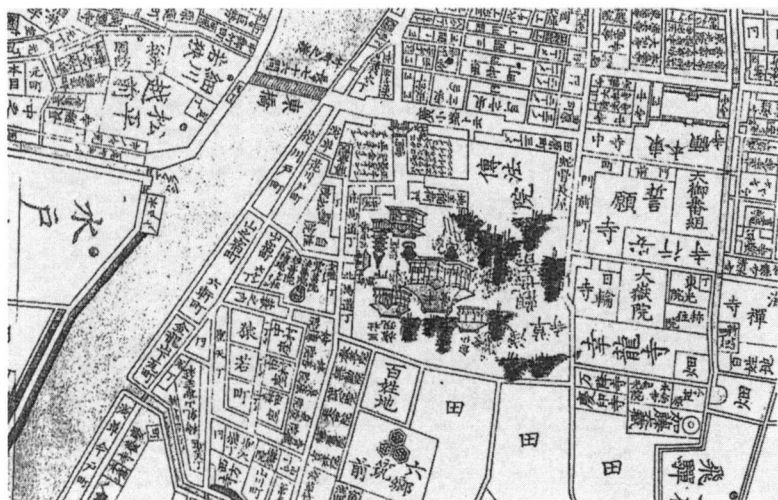


図1 浅草今戸町付近

『事典しらべる江戸時代』(柏書房発行、2001年) 309頁より転載。

覚

一、此度浅草今戸町橋方拾式軒目之町屋敷沽券証文并二  
一件諸書付御譲り慥ニ請取申所実正ニ御座候、然上ハ  
諸役御年貢我等方ニ而御上納可仕候、為念沽券請取依  
而如件

寛政十二年

申五月廿三日

賀喜助<sup>㊦</sup>

きや

父浦之助様

すなわち、江戸浅草今戸町の橋から一二軒目の町屋敷沽券  
証文と一件諸書付を譲り受けたという内容で、喜助ときやが  
連名で父浦之助に出したものである。これにより、それまで  
は浦之助が家屋敷をもっており、またこの段階でその相続が  
行われたことがわかる。

さて、ここで簡単に、町田家の二軒の店が出された浅草今  
戸町について触れておこう。浅草今戸町(現東京都台東区今  
戸一〜二丁目)は、正徳期に江戸に編入された町場であり、  
その対岸が向島である。また、今戸橋は、三谷堀にかかる橋

表 5 享和元年藤田屋勘定

費目	金額
申年酉年掛方残金	54 両 2 分
申年酉年炭掛方残金	4 両 2 分 2 朱
酉年残り物代金	14 両
酉年材木代残物	45 両
酉年外之荷物仕入残金	13 両
(小計有金) ①	131 両 1 分 (2 朱)
西極月有金 ②	31 両 1 分
有金 (①+②)	162 両 2 分 (162 両 2 分 1 朱)
戌年地面の金子	
戌年杉筏艘分・松筏河岸山分不 残・炭 320 俵 ③	102 両 2 分
合計 (①+②+③)	265 両 3 分 2 朱 (内金 10 両旦那様時かし)

注) ①山中清孝『近世武州名栗村の構造』所載 107 頁〈第 21 表江戸店勘定目録

(1) 享和元年〉を元に町田 5228 より改訂。

②数値は史料の記載まま、〔 〕内に計算上の数値をいれた。

である。(図 1 参照)そして、今戸町は、江戸とはいっても場末であったが、荒川―隅田川と流されてくる西川材の荷受けにはまさに最適な場所であったといえる。

ところで、藤田屋の場合も、特に毎年本家に決算を報告するということは、史料の残存状況から見てなかったようである。その中で、享和元年(一八〇一)の「店勘定目録」<sup>(42)</sup>だけが残っている。この史料は、前年に沽券証文を受け継いでいることも考慮すると、店の相続のために報告されたものとみてよいだろう。藤田屋の経営状況の一時点を示すものとして重要である。藤田屋喜助が新館の本家に提出したものであり、宛名が旦那様となっているところは、本家と喜助との関係を象徴的によくあらわしていると思われる。「店勘定目録」から作成したのが、表 5 である。内容を見ると、まず前年からの売掛、在庫、仕入残金などが小計され、一三一両一分

表 6 藤田屋喜助店へ送られた筏数

年次	筏数	売上代金
文化 7 年	6 艘 21 枚	158 両 1 分 12 匁 7 分 8 厘
文政 9 年	13.5 艘 4 振 48 枚	396 両 8 分 9 匁 25 分 12 厘
文政 11 年	13 艘 1 振	281 両 2 分 15 匁 17 分 4 厘

注) 町田 4126・4145・4155 より

\* 筏数に上荷は含めていない。筏の単位=艘 > 振 > 枚

となっている。それと享和元年の極月にある現金の三一両一分とを合計し、一六二両二分としている。享和二年正月には、その二口の合計で一旦勘定が行われている。その後、金額が書いていないが、不動産（地面之金子）があげられ、享和二年に仕入れた分と思われる杉筏・松筏・炭の代金に加えられ、四月に総決算されている。その全部の合計が、二六五両余となっている。前年に喜助は土地を譲り受け、今度は二六五両を相続し、名実共に店が任されたものと思われる。

最後に表 6 により、藤田屋から上名栗村に提出された「仕切帳」から、どの位の筏が送られていたのかを見ておきたい。隔年であるが、文化七年（一八一〇）から文政一一年（一八一八）まで送られた筏数量に増加が見られたことを指摘しておく。

天保期になると、本家やほかの出店に金を貸していることは確認できる。たとえば、本家に、天保六年二月に二〇〇両を、また同一〇年には六月に二〇〇両、一月に材木仕入前金として三〇〇両を貸している。<sup>(44)</sup> このようなところから、資金の融通および援助ができる程の余裕を持っていたと考えられよう。また、天保改革後の「諸問屋名前帳」には、<sup>(45)</sup> 藤田屋は「竹木炭薪問屋、浅草今戸家持藤田屋喜助」と名前が出てくる。

## おわりに

以上、西川地方の一山方荷主町田家が、江戸に出した最初の二軒の材木問屋の出店について検討してきた。江戸にどのように流通拠点を確立し、その店経営を行っていったのかについて、町田家自身および上名栗村の状況といった内的要因と江戸の材木市場の外的な要因との両面から考察した。その結果、町田家の江戸進出には、どちらの要因も重要な意味を持っていたことを明らかにできた。

西川地方は、宝暦〜明和期には、かなりの筏流送を行うようになっていた。その背景には、用材化を目的とした林業生産の展開が見られたのである。一方、近世中期以降は江戸の手前の千住等に成立した筏宿と山方荷主との直接取引の盛行により江戸材木問屋の衰退が進み、江戸周辺市場の著しい成長が同時期に見られるなど、江戸での材木問屋経営は厳しいものがあつた。このような状況のもとに、寛政期に町田家は二軒の江戸材木問屋を浅草今戸町に開設したのである。すなわち、町田家は、問屋に材木の販売を委託しておくだけでなく、直接取引に乗り出していったのである。このような町田家による流通ルートの整備は、自家は勿論のこと、西川地方のほかの材木商人たちにも大きな影響を与え、以後の西川材の流通発展に大きな役割を果たしたといえよう。

## 注

(1) 『武蔵国秩父郡上名栗村町田家文書』は、学習院大  
学史料館に所蔵されている。これまでに整理が終わった  
部分については、『武蔵国秩父郡上名栗村町田家文書』

(一)・(二)・(三)・(四)・(五)・(六)・(七)〔学習院  
大学史料館所蔵目録第八・九・一一・一三・一六・一九  
号、二二号、一九八六年・一九八八年・一九九二年・一  
九九六年・二〇〇四年、二〇〇七年〕が刊行されている。

本論文では、この史料を以下引用するときは、「町田(町田家文書) 番号」とする。また、目録未収載分については、現段階での整理番号であらわす。

- (2) 拙稿「近世西川地方における山方荷主町田家の江戸材木問屋経営―文政期の深川への出店を中心に―」(『学習院大学人文科学研究論集』5、学習院大学大学院人文科学研究科、一九九六年)
- (3) 山中清孝「近世武州名栗村の構造」(名栗村教育委員会、一九八一年)
- (4) 同右九六頁。
- (5) 加藤衛弘「近世山村の研究―江戸地廻り山村の成立と展開―」(吉川弘文館、二〇〇七年)
- (6) 町田三三三。
- (7) 高橋伸拓氏によれば、町田家が酒造業を開始したのは、寛政元年に酒造株を入手したことにはじまると指摘されている(高橋伸拓「近世後期関東における酒造業経営と酒の流通―地域酒造家の分析を中心に―」(『関東近世史研究会第四一回報告レジュメ、二〇〇八年』)。
- (8) 注(3) 山中前掲書。
- (9) 町田一〇七一四「流地証文之事」(元禄十二年十一月十七日、上名栗村庄三郎差出、佐兵衛宛)を一例とし

てあげておく。

- (10) 注(5) 加藤前掲書。
- (11) たとえば、享保五年の「武蔵国秩父郡上名栗村差出村明細帳(控)」(町田六三八)の一部をあげておく。  
「一、男耕作之間ニハ釜炭・鍛冶炭焼申候而、商売仕候、其外日用杯を取申候」とある。「宝暦三年七月武蔵国秩父郡上名栗村鑑様子大概書上帳下書」(町田一七八一)には、次のように出てくる。「当村石川ニ而幅二間余是ハ出水ニ而杉筏等少々宛出申候」とある。なお、参考のために、天保七年五月の「村明細帳」(町田一七九五)の一部をのせておく。「杉丸太諸材木川辺江出し置、出水待請、川越、入間川通り川下ヶ仕、江戸表江相廻し売捌、村中惣稼ニ仕、御年貢御上納夫食足し合ニ仕候」とあり、すっかり材木商売がメインになっている。
- (12) 町田一〇三五四。
- (13) 同右。
- (14) 島田錦蔵「川辺老番組古問屋組合文書と江戸材木市場」(徳川林政史研究所『研究紀要』昭和五十一年度、一九七六年)。
- (15) 「鞘付問屋人数名前延享四年分冊ノ一」(国立国会図書館所蔵旧幕府引継書マイクロフィルム)。



- (16) 島田錦藏「江戸材木問屋仲間の紛争と負担公役」『徳川林政史研究所研究紀要』昭和六十三年度、一九八九年、一八七～一九五頁。
- (17) 同右一九五～一九九頁。
- (18) 脇野博「近世西川林業における材木商経営」『徳川林政史研究所研究紀要』昭和五十九年度、一九八五年、一三七～二三八頁。
- (19) 以下筏宿については、『新修荒川区史』（荒川区役所、一九五五年）五四二～五四五頁による。
- (20) 江戸の仲買は、直接山方と取引できないので、千住の筏宿八人が「千住仲買」と公認されることになったら、不利になることを懸念して異議を唱えたのである。対抗策として江戸仲買は、古問屋とは取引しないことを申し合わせた。しかし、結局根本的な解決もなく、数ヶ月後に内済で終わっている。（島田前掲注（16）論文 一九九～二〇六頁。
- (21) 同右。なお、文政一〇年（一八二七）に千住八人組が江戸の仲買に加入を許されたことによって一応の決着を見ている。
- (22) 「一〇九 寛政十一年九月 入間郡・新座郡・高麗郡村々炭薪江戸表直売ニ付訴訟一件」『埼玉県史』資料編（一六）四六三～四七四頁。
- (23) 町田家過去帳によると、「文政五、二、二八勝次郎 栄昌泰翁院安居土行年六十四才、町田屋栄助ト改メ江戸浅草今戸町ニ出」と記されている。
- (24) 寛政十一年三月宗門人別帳下書」（町田二六五五）には、「名主栄次郎江戸表ニ住居仕候、母とみ同断」とある。
- (25) 町田一四四一八。
- (26) 伊勢屋市郎兵衛は、享保五年（一七二〇）の名前帳にも名前がのっている。安永六年に年行事（二年交代の組合の連絡役）をつとめた後は、同十年には休株していたらしい（島田錦藏『江戸材木問屋組合正史』、大日本山林会、一九七六年、以下『正史』と呼ぶ）。
- (27) 町田一四四一七・一四四一九・一四四二〇。
- (28) 注（26）『正史』収載古文書篇史料番号（37）
- (29) 山中氏は、栄次郎は浦之助ではないかとも指摘している。つまり、隠居の浦之助が江戸に店を出し、寛政一〇年（一七九八）年以降栄次郎に名主を譲った勝次郎へその運営を任せたとするのである。（注（3）山中前掲書一四六頁）しかし、どちらにせよ、なぜ名前が違うのかという点については明確にならない。筆者は注（30）

によって、寛政一〇年以前にも勝次郎が江戸にいたことが窺えるところから、今のところは栄次郎の名前を使つたのは勝次郎だという立場をとっておく。なお、店の進出、初期の経営に浦之助の果たした役割は大きかったと思われる。

(30) 町田五一九八。

(31) 拙稿「近世西川材の流送と筏仲間の成立」(『名栗村史研究那栗郷』三、二〇〇二年)。

(32) 町田五二三三。

(33) 注(26)『正史』収載古文書篇資料番号(46)

(34) 町田一四八八〇。

(35) 町田一〇七五二、参考のため、流地証文の一部を引用する。傍線部分を見れば、畑の面積に書かれている以上の広さのものであったことが見てとれよう。

「流質地証文之事

たつ之沢

一下々畑廿歩

同所

一切畑拾貳歩

同所

一切畑壹畝三步

反別合式畝五歩 但壹ヶ所

境前々有来通先達而貴殿江流地ニ相渡候

山境之戸羽者五左衛門井戸向之そ根ヲ引登セ

申候、訳者大堀切り

右畑山先達而貴殿江質地ニ相渡金貳拾三両也：(以下

略)

(36) 町田五二三四。

(37) 町田一四四二七。

(38) 嘉永四年「諸問屋名前帳」(旧幕府引継書)

(39) 町田家略系図参照。町田家過去帳写によると、「天保二、一二、二四、浦之助娘きや億營栄寿大姉、行年六十七才、浅草今戸町出店主トナリ智喜助ト妻合セル、同橋場法源寺二葬」と記されている。

(40) 町田一四四二八。

(41) 『江戸町方書上』(『旧幕府引継書江戸町方書上浅草上』新人物往来社、一九八七年)四二七、四三三頁。

(42) 町田五二二八。

(43) 町田一四四二九。

(44) 前田一一三四二、一一三四三。

(45) 前注(38)。